

ABS(Association for Borderlands Studies)第55回年次大会短報

The Association for Borderlands Studies の第55回年次大会が、2013年4月11日(木)から13日(土)にかけて、合衆国コロラド州デンバーのグランドハイアットホテルにて開催されました。毎年4月上旬に催される本学会年次大会では、これまで、GCOE「境界研究の拠点形成」の関係者が継続的に数多く参加し、存在感を示してきました。本年は例年以上に多くの関係者が出席し、様々な場面で活躍を見せました。

本年年次大会は34のパネルで構成されました。大会の開始を告げる11日(木)午前の第1パネルでは、GCOEやJIBSN(境界地域研究ネットワーク JAPAN)の活動の長きに渡る同伴者である田村慶子氏(北九州大学)が報告を行いました。氏は、“Across the Causeway: Singapore’s ‘Border Expansion’ into Malaysia”と



題する報告のなかで、シンガポールと橋で繋がる地域であるマレーシアのジョホール地方が、シンガポールの後背地として開発されるに至った経緯と現状を紹介しました。また、大会の結びとなる13日(土)夕方の第34パネルでは、井潤裕氏(GCOE)が報告しました。“Sakhalin, Kunashir, Yonaguni, and Tsushima: Current Situations in the Japanese ‘Border’ Regions”と題する氏の報告では、「稚内－サハリン」「根室－国後」「与那国－花蓮」「福岡－対馬－釜山」という日本と他国との境界地域の現状が、豊富な渡航記録写真とともに概観されました。大会の最初と最後を飾るパネルにGCOE関係者の報告が組み込まれるという大会プログラムの構成は、ABSという学会とGCOEの連携の深化を物語るかのようでした。

大会では、若手のGCOE関係者が主体的に組織したパネルも複数設けられました。12日(木)のパネル“Mobility Makes the Heart Grow Fonder?: Migration, Repatriation, and Border Crossing Phenomena in Eurasia”や、13日(土)のパネル“De-Bordering Processes of Environmental Change and Natural Resources Development, and the Changing Structure of Governance Systems”です。前者のパネルでは、ユーラシア各地における人の移動の歴史経



験の過去と現在に焦点があてられ、中山大將氏(日本学術振興会特別研究員)が第2次世界大戦後のサハリン残留日本人とその人口移動について、左近幸村氏(日本学術振興会特別研究員)が日露戦争後のロシア大西洋航路定期船による人の移動と、ユダヤ系移民に対するパスポート発行問題について、小松久恵



氏(追手門学院大学)が現代イギリスのアジア系作家の文学作品における日常世界像と自己像について、それぞれ報告しました。同パネルと並行した別パネルでは、井上暁子氏(GCOE)が関連する内容の報告を行い、現代ドイツにおいてポーランド移民作家が展開する、越境的な文化イメージの構築戦略について論

じました。一方、13日(土)のパネルでは、北東アジア、東南アジアにおける自然と資源の管理が主題に設定され、花松泰倫氏(GCOE)がアムール川とオホーツク海が連関するエコシステムと、科学的なデータの共有と議論のための多国間コンソーシアムの構築について、峯田史郎氏(早稲田大学アジア研究機構)がメコン川の多国間管理を目指した諸制度と、経済開発をめぐる中国国内政治の展開について、平山陽洋氏(GCOE)が南シナ海の資源開発における協調路線の頓挫と排他的経済水域の設定をめぐる新動向について、それぞれ報告しました。2つのパネルを中心とするこれら報告の多くは、スラブ研究センターの若手研究者により昨年7月に小樽で開催された、「GCOE-SRC 研究員セミナー 第3回ミニカンファレンス」の議論の成果を、海外に発信する意義を持ちました(「第3回ミニカンファレンス」の内容については、以下の報告書を参照ください:URL <http://borderstudies.jp/essays/essays/pdf/otaru3.pdf>)

大会最終日の13日(土)には、世界における境界研究の今後を議論するパネルが複数設けられました。それらパネルでは、世界各地に存在する境界研究組織ごとの活動をふまえながら、各組織の相互協力のもとに、境界研究のネットワークを将来的にいかに拡大、発展させていくかが討議されました。それらパネルに登壇した岩下明裕氏(GCOE 拠点リーダー)は、GCOEの活動を紹介し、日本から海外に向けた活動の一環として、英語誌 Eurasia Border Review (EBR)の刊行や、博物館展示に基づく英語版DVDの作成を、紹介しました。関連して、大会最終日のお昼には、博物館第4期展示「先住民と国境」から生まれたDVDが上映されました。上映に際し、展示担当者の1人である山崎幸治氏(アイヌ・先住民研究センター、GCOE 事業推進員)による解説もあり、日本のアイヌと北米のヤキの生活世界を結び合わせて考える機会が提供されました。

GCOEの活動紹介のなかで、岩下氏は、また、



昨年 11 月に BRIT (Border Regions in Transition) の第 12 回大会を、福岡－対馬－釜山で開催した経験に触れました。その経験をふまえ、氏は、世界各地の境界問題に関わる研究者と実務家の参加を促すような、国際会議の組織と運営を、形式にとらわれすぎず柔軟に実現することの重要性を指摘しました。岩下氏と重なり合う主張は、EBR 編集者を務めるポール・リチャードソン氏 (極東連邦大学、ロシア) から提示されました。リチャードソン氏は、自身が BRIT 第 12 回大会に参加した経験を語り、この大会が、ロシア極東やインド等を含めた、世界各地の研究者と実務家を実際に出会わせ、将来的なネットワークの拡大に寄与する場になったと報告しました。

今年度の ABS 年次大会では、BRIT 第 12 回大会での「出会い」を 1 つの出発点としたパネルも組織されました。池直美氏 (北大公共政策学連携研究部、GCOE 事業推進員) や、ABS の主要メンバーであるキンバリー・コリンズ氏 (カリフォルニア州立大学) ら、BRIT 参加者によるパネル“‘Othering’ in Borderlands”です。大会初日に催された本パネルでは、日本において「他者化」され続けてきた在日朝鮮人社会について池氏が、国境行政がはらむ「他者化」の暴力を現場で意識し続けることの必要性と倫理についてコリンズ氏が報告しました。パネルを通して、知、表象、権力にまつわる主題が多面的に論じられ、ディシプリンや研究対象地域を超えた議論が展開されました。こうした協働の試みが、今後境界研究のネットワークが世界的に拡大、発展するなかで、数多く実現されることを願ってやみません。

GCOE 関係者の活躍は、他にも多くの場面で見られました。ポール・リチャードソン氏は、大会最終日の個人報告で、2012 年の APEC 首脳会議開催をきっかけに変貌しつつある、ロシアのウラジオストクの役割について論じました。また、これまで GCOE の各種企画に参加、貢献してきたエドワード・ボイル氏 (北大法学研究科博士課程) は、大会初日に催された「主権」を再考するパネルのなかで、ヨーロッパの境界研究を牽引する、ジェームズ・スコット、イルカ・リッカネンの両氏 (両氏とも、東フィンランド大学) とともに登壇しました。ボイル氏は、近世日本において、ヨーロッパの「主権」概念を後に受容する素地が準備された歴史を示す事例として、蝦夷地におけるお寺を紹介した人口登録や、地図作成の進展を位置づける議論を展開しました。



境界研究は、まさに現在、世界各地の研究者、実務家の「出会い」を通してネットワークを拡充させ、学問的に多様化、深化しつつあります。ABS 年次大会の 3 日間を通して示された、GCOE 関係者の活躍は、世界における境界研究の発展に多面的に貢献するものを感じられました。なお、本短報とは別に、GCOE 関係者による個々の参加記が、近日中に HP に掲載される予定です。

平山陽洋(GCOE 学術研究員)